

カーン宣言（仮訳）

閉鎖性海域の環境管理

EMECS 7 / ECSA40

2006年5月12日

私達の共有責任

第7回世界閉鎖性海域環境保全会議（EMECS7 / ECSA40）は、2006年5月9日から12日までカーン市で開催され、これには25カ国から約350人が参加した。この参加者には、研究者、行政官、政策立案者、プログラムマネージャー、企業、NGO代表、教師、環境教育専門家、中学校から大学院レベルの学生達が含まれる。この会議は、GEMEL（フランス河口・沿岸域環境研究学会）とECSA（河口域・沿岸科学学会）の協力の下、他のフランスの組織、国際的な機関が、日本の神戸にある国際エメックスセンターと共同して開催された。今回のテーマは、「閉鎖性海域の持続可能な共同発展：私達の共有責任」で、美しく、歴史あるカーン市で開催されたことに深く感謝したい。この宣言は、同会議で行われた討論の成果である。

会議のテーマの「私達の共有責任（Our Shared Responsibility）」という言葉は、三語から成るが、それは三つの意味を持つ。まず最初の、「私達の(Our)」の言葉は、地球規模の範囲を意味する。それは、この会議やEMECS、あるいはこれらに協力する諸団体の枠を越え、世界の沿岸海域と集水域に住む全ての人々を指す。これら、沿岸海域ならびに集水域とそこに住む人々の関係は、沿岸海域を経済、文化、環境、生活の基盤とする「共存活動の圏域」(working landscapes)なのである。我々人間は、世界の沿岸海域の一部として深く関わってきており、切り離すことのできない存在である。「私達の」将来は、これら「共存活動の圏域」、すなわち、水質、経済的生産性、レクリエーションの機会、景観の享受の、将来にかかっている。

第二の「共有(Shared)」の言葉は、連携を指す。これらの連携は、グローバルなレベルで世界の沿岸海域の人々と「共存活動の圏域」の間を結ぶ。しかし、それ以外にも、他のレベルを結ぶところがある：すなわち、それは、個々の沿岸海域と集水域のつながりであり、経済と環境のつながりであり、人々と生活の質のつながりである。また、実際的なレベルでは市民と政府、研究と行動、教育とコミットメント（公約）間のつながりでもある。我々は、知識がより迅速に効果的な形で環境政策に実を結ぶよう、科学と政策の連携がより強化されることを特に望むものである。また「共有」の言葉には、自然科学者と、経済学者、社会学者、教育者、芸術家との結びつきを含む、科学そのもののもつ広い範囲も含まれる。さらに、「共有」という言葉には、もう一つ、市民から行政関係者まで、世界の沿岸海域にかかわりをもつ全ての人々による、情報への自由なアクセスの意味も含まれる。

第三の「責任（Responsibility）」という言葉には、上の二つの言葉を統合する意味がある。すなわち「共存活動の圏域」としての世界の沿岸海域の未来は、明らかに「私達の」関心事であり、

「共存活動の圏域」の中に人々を統合する多種多様な連携によって「共有」される。しかし、同時に、地球規模での、地域での、国ごとでの、またローカルでの「責任」が存在する。個々のレベルでいえば、これらの言葉は、實際上、それぞれ別個のように思われるが、その境界は単に人為的に設けられたものにすぎない。「私達の共有責任」が意図するものは、情報が自由に全方向に流れるよう、その境界を除去することでもある。これらの各レベルは、スポーツチームの各メンバーにたとえることができる：すなわち、それぞれ、プレーヤーとして独自の役割を有するポジションにつくが、個々のプレーヤーの協力なしに勝利をあげることできないのと同様である。環境政策は、いかなるレベルでも実現可能ではあるが、全てのレベルで意志の疎通と協力がなければ成功しない。

EMECS7 において、2004 年 12 月に東南アジア地域を襲った津波の被害の報告があった。同様に、水質の悪化と生息地破壊が原因となった生物資源の減少により、沿岸地域の経済、住民の健康が脅威を受けている報告もあった。これらの経験を通じて「私達の」沿岸海域管理の失敗の結果、人々が苦しんでいることを忘れてはならない。同時にこれらの被害者に対し、地元の、地域の、また国の、あるいは全世界の人々から寄せられた救援の話は心暖まるものであった。これらの経験が物語るのは、「私達の共有責任」とは、単なる言葉や我々の願いを超える以上のものがあるということである。我々は、地球規模のチームとして、良い結果を生み出すよう、共に努力することができる。

過去のエメックス会議で採択された宣言は、世界の沿岸海域の環境管理を向上させる具体的な対策を含むものであった。我々は、これら各具体案を、現在、さらに将来に向けての青写真としてここに全面的に支持する。

これらの中には、点源及び非点源の栄養塩類汚染の低減対策のように、沿岸海域やかけがえのない生物資源に対して明らかな脅威となっている原因に対するものもある。この宣言で我々は、これらの諸活動が、「私達の共有責任」の中心的な部分であると認識した上で、これまでの宣言に盛り込まれてきた活動や方向付けをさらに促進するように、以下の将来に向けた積極的な施策を示したいと考える。我々の提案は以下のとおりである：

- ・ 知識、技術的な進歩は、科学者に対し、「共存活動の圏域」がどのように機能するかについて、実に多くの新しい知識を提供してきた。今日、かつてないほどに、我々は科学者に対し、我々みんなが「私達の共有責任」をより効果的に果たせるように、その知識を政策立案者、市民に対して伝達してくれることを願っている。
- ・ 研究者、学者の枠を越えて専門知識を共有、伝達していくためには、一般の人にも分かる平易な言葉に置き換える必要がある。我々は、環境教育の専門家や NGO が若者達や市民に対し、知識の翻訳者としての役割を担い続けてくれることを強く希望する。この場合、知識の翻訳者としての EMECS の役割はますます重要であり、それはインターネット上のネットワーク活動に限らず、全ての分野から人々を集める触媒としての EMECS が、「私達の共有責任」を実現するために努力していくということでもある。EMECS は、会議やワークショップの結果を、

より広く人々に知らしめるための指導性を発揮していくことが期待されている。

- ・ 地元レベルでの「責任」は、地域レベルの、あるいは全国レベルの、ひいては地球規模の問題であるが、これこそ、「私達の」沿岸海域が抱える問題で、政府や組織によっては、しばしば軽視されがちである。このようなトップダウン的な（上意下達的な）アプローチは、沿岸海域管理にとって重要であると実証されている。しかし、地域社会の参加なしにはプログラムは持続されないのは明らかである。我々は、地元のリーダーや市民自身が「私達の共有責任」という立場から、積極的にプログラムを支持し参加してくれるよう地元に基づいたプログラムが今後も継承、発展することを願うものである。
- ・ タイのバンコク市で開かれた EMECS2003 では、エメックス青少年環境教育交流セッションが初めて導入された。これを受けて EMECS7 においては、50 人以上の学生、教師がポスター発表、口頭発表、特別セッションでの公開討論を通じて、あるいはフィールドトリップのホストとして貢献した。これは「私達の共有責任」の全てのレベルと意義を実現する、素晴らしいイニシアティブとなった。我々は、心から「私達の」青少年環境教育交流を支持したい。我々は、EMECS に対し、賢明、かつ思慮深く多大な貢献をしているこれらの献身的な学生、教育者達に深く感謝するものである。
- ・ EMECS の歴史からも、世界の生息可能な土地の分布という観点からも、北半球の沿岸海域に重点を置く視点が固定化している。しかし、「私達の共有責任」が名実ともに地球規模になるためには、EMECS は、南半球、つまりアフリカ、豪州、南米にイニシアティブを追求する必要がある。この宣言により、我々は、このための方向での努力に敬意を払い、今後これらの大陸での市民に「私達の」活動に参加するよう望みたい。

「共存活動の圏域」は、次世代に負担（負の遺産）ではなく、財産として残されるべきものである。青少年環境教育交流セッションに参加した学生や教師達は、沿岸海域を修復すべき課題として受け継ぐ場ではなく、楽しみの対象として受け継ぎたいと思っている。彼らは我々に助けを求めている。この場合、我々自身の成功の物差しは、彼らの要請に応えられるか否かにもっぱらかかっている。我々が、次世代に約束することが、我々の唯一の努力目標であることを肝に銘じ、カーン宣言の結びとしたい。これこそが世界の閉鎖性海域の将来に対し負っている、「私達の共有責任」の重要性を認識する究極の目標である。

EMECS7/ECSA40 参加者一同
フランス カーン市
2006 年 5 月 12 日